2 日目　川崎-神奈川-保土ヶ谷-戸塚

金曜日に聞いた天気予報は土曜日晴れ日曜日は曇りで、土曜日は仕事、日曜日にウォーキングと決める。
ところが、土曜日の朝の天気予報は、土曜日は曇り日曜日は雨、それではと予定を変更し、10 月 24 日(土)は東海道 53 次の 2 日目で、川崎を 9 時半にスタート、天候は曇り。

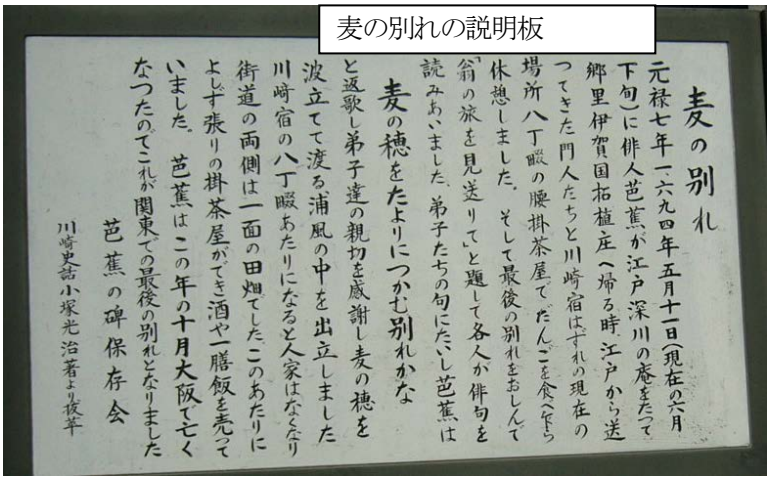
川崎宿　2 番目

六郷の渡しから川崎宿への絵図のパネル

六郷橋のたもとから旧東海道を出発。
旧東海道は第一京浜と別れて川崎の繁華街の中を通っている。
川崎宿には宿場の遺構は何も残っておらず、説明板のみ。　最初にあるのは田中本陣跡の碑、田中休愚と言う人がこの本陣を経営していた人で、宿場としての川崎を疲弊から立て直したとのこと。　休愚などと謙虚なこと!

田中本陣の碑

麦の別れの説明板



麦の別れ

元禄七年(一六九四年)五月十一日(現在の六月下旬)に俳人芭蕉が江戸深川の庵をたって郷里伊賀国拓植庄(帰る時江戸から送ってきた門人たちと川崎宿はずれの現在の場所八丁畷の腰掛茶屋でだんごを食べたら休憩しました。そして最後の別れをおしんで「翁の旅を見送りて」と題して各人が俳句を読みあいました。弟子たちの句にたいし芭蕉は

麦の穂をたよりにつかむ別れかな

と返歌し弟子達の親切を感謝し麦の穂を波立てて渡る浦風の中を出立しました。川崎宿の八丁畷あたりになると人家はなくなり街道の両側は一面の田畑でした。このあたりによしず張りの掛茶屋ができ酒や一膳飯を売っていました。芭蕉はこの年の十月大阪で亡くなったのでこれが関東での最後の別れとなりました。

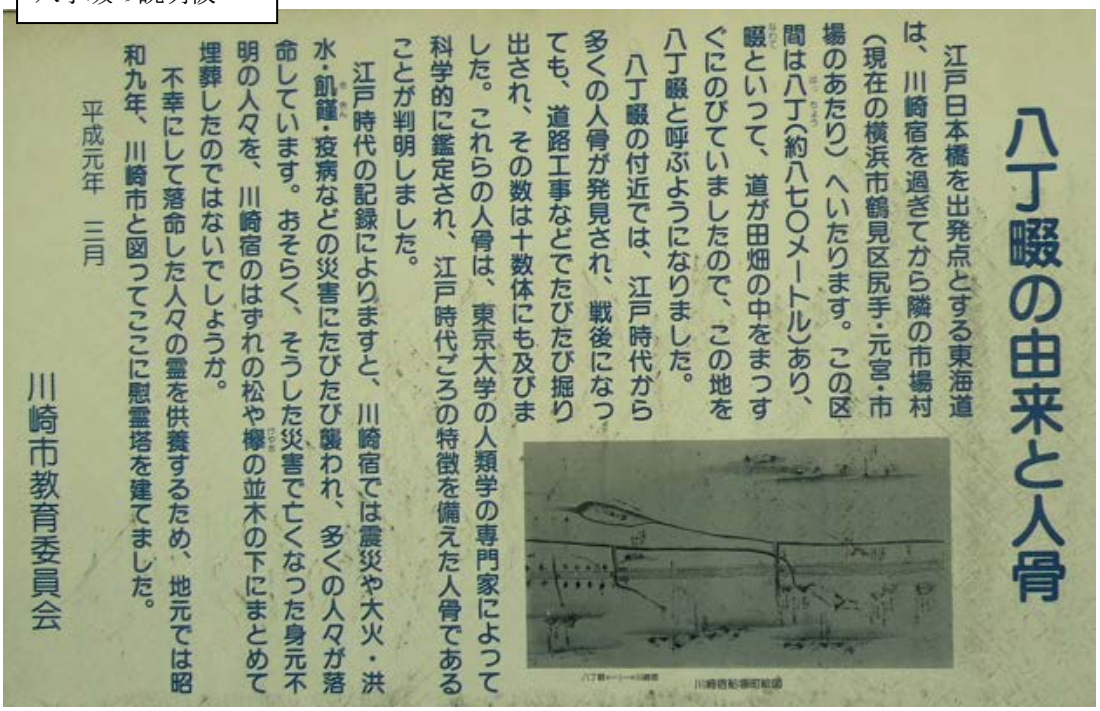
芭蕉の碑保存会

川崎史話小塚光治著より抜粋

麦の別れの碑

川崎の繁華街で道を迷い、元に戻って歩き直し、繁華街のはずれの八丁畷にある、松尾芭蕉の句碑で写真と休憩。
この句は、関東での最後の句となった「麦の穂をたよりにつかむ別れかな」で、麦の別れといわれているとのこと。
旧東海道は京浜急行の踏み切りを渡り、八丁畷駅の前を通るが、その駅前に八丁畷の言われを書いた説明板がある。

八丁畷の説明板



八丁畷の由来と人骨

江戸日本橋を出発点とする東海道は、川崎宿を過ぎてから隣の市場村（現在の横浜市鶴見区尻手・元宮・市場のあたり）へいたります。この区間は八丁（約八七〇メートル）あり、畷といって、道が田畑の中をまっすぐにのびていましたので、この地を八丁畷と呼ぶようになりました。

八丁畷の付近では、江戸時代から多くの人骨が発見され、戦後になっても、道路工事などでたびたび掘り出され、その数は十数体にも及びました。これらの人骨は、東京大学の人類学の専門家によって科学的に鑑定され、江戸時代ごろの特徴を備えた人骨であることが判明しました。

江戸時代の記録によりますと、川崎宿では震災や大火・洪水・飢饉・疫病などの災害にたびたび襲われ、多くの人々が落命しています。おそらく、そうした災害で亡くなった身元不明の人々を、川崎宿のはずれの松や欅の並木の下にまとめて埋葬したのではないでしょうか。

不幸にして落命した人々の霊を供養するため、地元では昭和九年、川崎市と図ってここに慰霊塔を建てました。

平成元年　三月

川崎市教育委員会

この説明板を読み「江戸時代頃の特徴を備えた人骨」の特徴とは一体何だろうと考えてしまった。

市場の一里塚

八丁畷の先は昔は市場村と呼ばれていたところで、日本橋を出て初めて見る現存する一里塚がある。この市場一里塚の一角ある道祖神がかわいらしい。

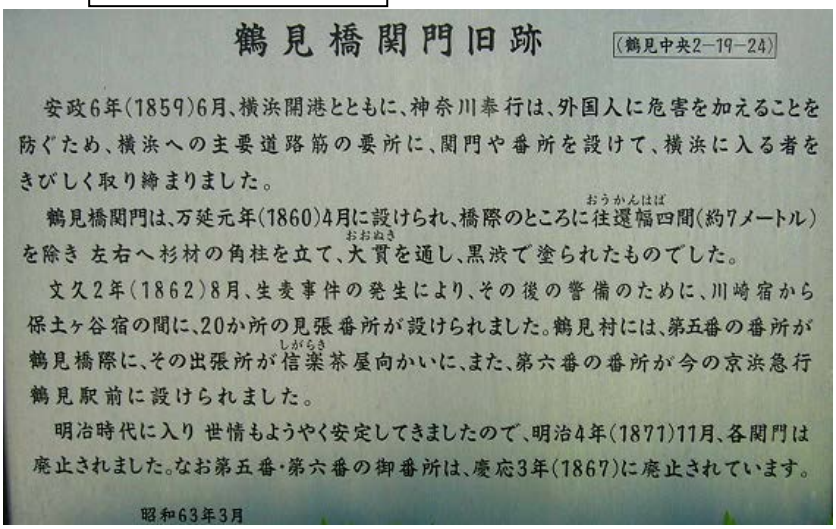
市場村の一里塚碑

市場一里塚碑の道祖神

鶴見

鶴見橋関門碑

鶴見橋関門の説明



鶴見橋関門旧跡　（鶴見中央2−19−24）

安政6年(1859)6月、横浜開港とともに、神奈川奉行は、外国人に危害を加えることを防ぐため、横浜への主要道路筋の要所に、関門や番所を設けて、横浜に入る者をきびしく取り締まりました。

鶴見橋関門は、万延元年(1860)4月に設けられ、橋際のところに往還幅四間(約7メートル)を除き 左右へ杉材の角柱を立て、大貫を通し、黒渋で塗られたものでした。

文久2年(1862)8月、生麦事件の発生により、その後の警備のために、川崎宿から保土ヶ谷宿の間に、20か所の見張番所が設けられました。鶴見村には、第五番の番所が鶴見橋際に、その出張所が信楽茶屋向かいに、また、第六番の番所が今の京浜急行鶴見駅前に設けられました。

明治時代に入り 世情もようやく安定してきましたので、明治4年(1871)11月、各関門は廃止されました。なお第五番・第六番の御番所は、慶応3年(1867)に廃止されています。

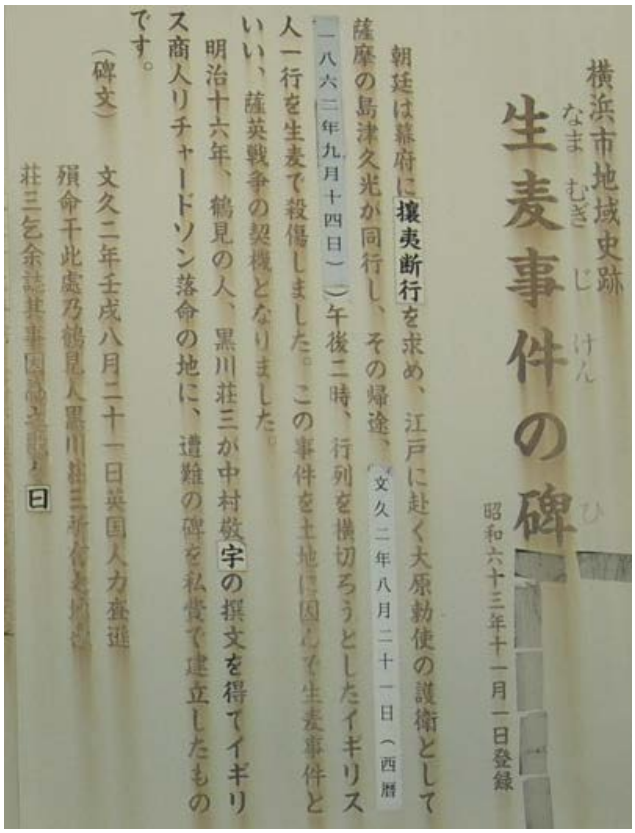
昭和63年3月

市場村一里塚を過ぎ、鶴見川の鶴見橋を渡って鶴見へ。　幕末には、横浜居住の外国人への浪人の襲撃を防ぐ為にここに関所を設けたとある。
JR 鶴見駅の中を通り抜けるが、商店街は車を止めてフリーマーケットとイベント開催中、子供たちが路上に座っているが、格好からすると多分「よさこい」を踊って練り歩きだろうな。
鶴見駅から暫く歩くと、道の両側に魚屋さんが何軒もあり、魚市場の中を歩いているような雰囲気となり、地名を見ると生麦魚河岸とある、なるほど。

ビール工場と生麦事件

キリンビールの大きな工場の前を通り過ぎると生麦事件の記念碑があり、写真と休憩。
キリンビールには試飲ツアー用の建物とレストランもあって、観光バスで大勢の人が来ているのが見える。

生麦事件の説明板


横浜市地域史跡

生麦事件の碑

昭和六十三年十一月一日登録

朝廷は幕府に攘夷断行を求め、江戸に赴く大原勅使の護衛として薩摩の島津久光が同行し、その帰途、（文久二年八月二十一日（西暦一八六二年九月十四日））午後二時、行列を横切ろうとしたイギリス人一行を生麦で殺傷しました。この事件を土地に因んで生麦事件といい、薩英戦争の契機となりました。

明治十六年、鶴見の人、黒川荘三が中村敬宇の撰文を得てイギリス商人リチャードソン落命の地に、遭難の碑を私費で建立したものです。

（碑文）　文久二年壬戌八月二十一日英国人力奔逝
殞命于此處乃鶴見人黒川荘三所倩表揭焉
荘三乞余誌其事因為之記　日

生麦事件の経緯は、元は漢文で石碑に刻まれているが、左の写真の現代語訳の説明文があった。

生麦事件の碑

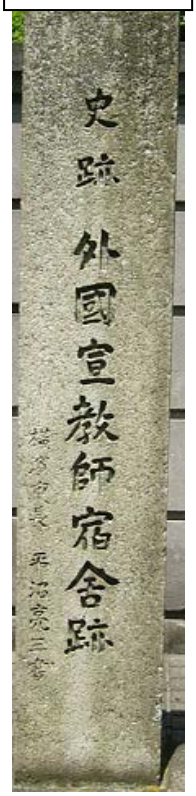
旧東海道は生麦から第一京浜と合流し、遺跡は全く無い広い自動車道の歩道を延々と続き、右手に、東海道線・京浜根岸線・京浜急行の電車が走るのを眺めながら歩き、鶴見から子安を過ぎ、東神奈川で休憩して昼食はカツ丼。

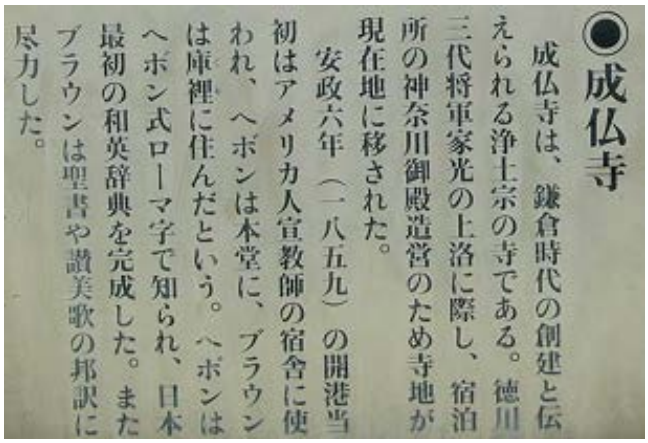
神奈川宿　３番目

父母のしきりにこひし雉子の聲
はせを翁

東神奈川の手前からを過ぎてから、旧東海道は第一京浜を離れて細い脇道となるが、旧跡には「神奈川宿歴史の道」と描かれた説明板があって親切、この宿場は寺が多い。
最初の良和泉寺には「幕末に、諸外国の領事館に充てられることを快ししないこの寺の住職は、本堂の屋根をはがし、修理中であるとの理由で幕府の命令を断った」との説明がある、住職は「攘夷派」だったのだろう。
次の能満寺の門前には芭蕉の句碑がある。
領事館を拒否したことが話題になるほど、幕末のこのあたりは横浜開港を受け、各国の領事館となった寺が多かった様である。

成仏寺の碑

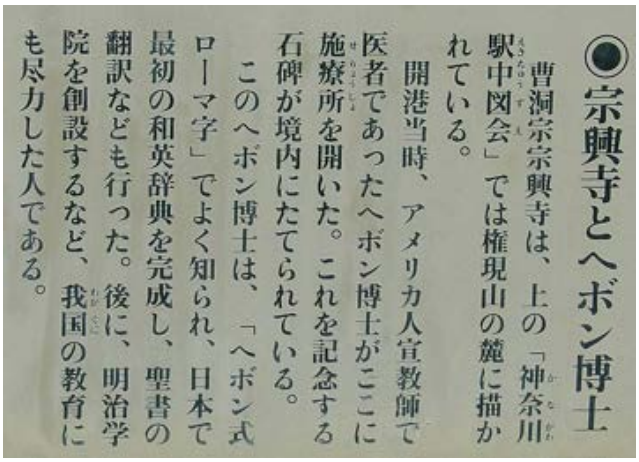




◉成仏寺

成仏寺は、鎌倉時代の創建と伝えられる浄土宗の寺である。徳川三代将軍家光の上洛に際し、宿泊所の神奈川御殿造営のため寺地が現在地に移された。

安政六年（一八五九）の開港当初はアメリカ人宣教師の宿舎に使われ、ヘボンは本堂に、ブラウンは庫裡に住んだという。ヘボンはヘボン式ローマ字で知られ、日本最初の和英辞典を完成した。またブラウンは聖書や讃美歌の邦訳に尽力した。



◉宗興寺とヘボン博士

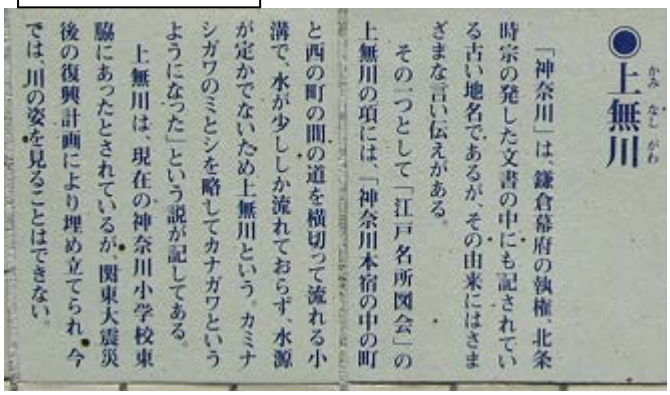
曹洞宗宗興寺は、上の「神奈川駅中図会」では権現山の麓に描かれている。

開港当時、アメリカ人宣教師で医者であったヘボン博士がここに施療所を開いた。これを記念する石碑が境内にたてられている。

このヘボン博士は、「ヘボン式ローマ字」でよく知られ、日本で最初の和英辞典を完成し、聖書の翻訳なども行った。後に、明治学院を創設するなど、我国の教育にも尽力した人である。

甚行寺の碑

神奈川の由来



◉上無川

「神奈川」は、鎌倉幕府の執権、北条時宗の発した文書の中にも記されている古い地名であるが、その由来にはさまざまな言い伝えがある。

その一つとして「江戸名所図会」の上無川の項には、「神奈川本宿の中の町と西の町の間の道を横切って流れる小溝で、水が少ししか流れておらず、水源が定かでないため上無川という。カミナシガワのミとシを略してカナガワというようになった」という説が記してある。

上無川は、現在の神奈川小学校東脇にあったとされているが、関東大震災後の復興計画により埋め立てられ、今では、川の姿を見ることはできない。

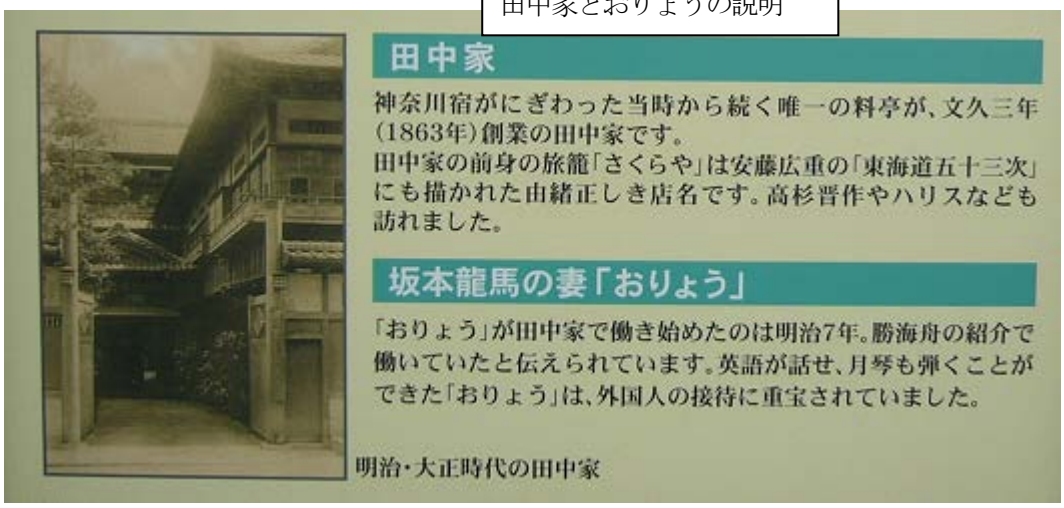
成仏寺には「外国宣教師宿舎跡」の碑があり、ヘボン式ローマ字で知られるヘボンも住んでいた。 ヘボンは医者でもあり、その施療所(病院)の碑が宋興寺に、普門寺にはイギリス士官宿舎があり、甚行寺にはフランス公使館跡の碑がある。神社や寺だけでなく、復元した「高札場」や「神奈川の大井戸」があり、「神奈川」の由来の説明板もある。

旧東海道は、洲崎天神の前を通り、石畳道の商店街を抜け、京浜急行と東海道線の上の橋を渡り、緩やかな坂道を上がって行く。

坂道の途中に、江戸時代から続く料亭「田中家」、と言っても建物自体は現代のもの、その説明板に坂本龍馬の妻「おりょう」が勝海舟の紹介でこの料亭で働いていたと書いてある。
「龍馬がいく」でも「おりょう」の月琴はでてくるが英語の記憶はない。　長崎時代に学んだのだろうか。　それにしても司馬遼の「おりょう」は余り良いイメージではなかったな。

旧東海道は横浜駅の北側を大きく迂回して保土ヶ谷に向かう。

田中家とおりょうの説明



保土ヶ谷宿　4番目

松原商店街の手前に保土ヶ谷宿の説明板があり、旧東海道はその商店街を通り抜け、「歴史の道」の案内に従い、直進して相鉄の天王町駅をくぐり抜け、さつき商店街を通り過ぎると保土ヶ谷宿。

橘樹神社の力石

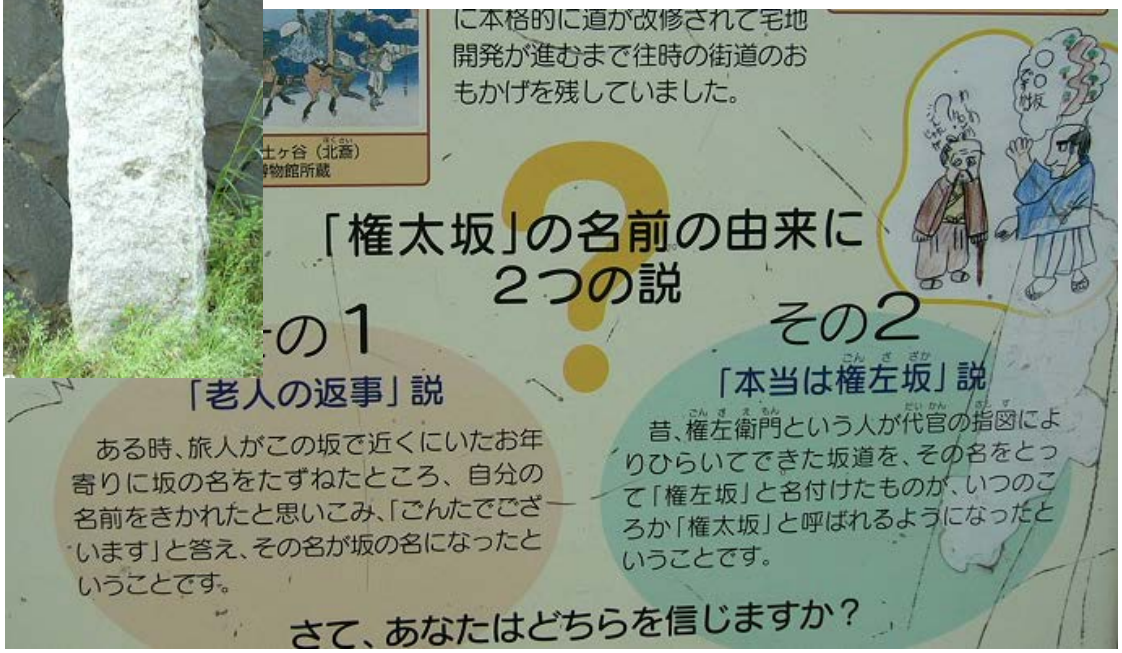
途中で休憩した橘樹神社には3個の力石が置かれ、誰でも力試しができそう、ぎっくり腰になるかも。保土ヶ谷の宿場にはいっても遺跡は無く、問屋場跡の碑、高札場跡の碑のみ。　旧東海道は、JRの踏み切りを渡ると国道1号線にぶつかり、合流する。合流地点の信号を渡るとすぐに苅部本陣跡の碑があり、その横には本陣の玄関だけが残っている。国道1号線沿いに歩いていくと二つの脇本陣の碑があり、建物無しの碑のみ。

その先に旅籠(本金子屋)、この近在では珍しく建物が残っている。　と言ってもかなりリニューアルされていて現在も人が住んでいる模様。　この旅籠の入り口の扉が立派だった。

旅籠(本金子屋)

旅籠の入り口の扉

権太坂
保土ヶ谷宿のはずれとなる、上方見付けを過ぎると、旧東海道は国道１号線を離れて住宅街の中をはいり、元町で左折して暫くあるくと右折して坂道となり、この坂が有名な権太坂。
住宅に囲まれた、かなり急な坂道を登っていくと高校があり、その先には権太坂小学校があって、権太坂の碑とその説明板がある。
権太坂の名の由来、あなたはどちらを信じますか?



権太坂の次の坂は焼餅坂、残念ながら嫉妬の焼餅ではなく食べる方。

権太坂の後はただただひたすらに歩き、戸塚駅にたどり着いたのは４時。
本日は 4.5 万歩を歩き距離は約 30Km。
足の裏の皮が厚くなったようでマメは出来ず、疲労感のみ。

2日目